

岩田 誠, 河内 十郎, 河村 満●監訳

『神経心理学事典』

書評者

山鳥 重 (神戸学院大学人文学部人間心理学科教授)



神経心理学に関心を持つ人間にとつては、願ってもない書物が翻訳出版された。神経心理学は、脳損傷と心理障害、あるいは脳機能と心理現象の相関を追及しているが、問題が問題だけに、初心者にはびったりの、手元で使える参考書というのがなかなかない。記述が心理的側面だけに集中しているのも困るが、機能的側面だけに集中しているのもやっぱり困る。本書はこのバランスが絶妙である。神経解剖学も、神経生理学も、神経学(神経内科・脳外科・精神科を含めて)も、実験心理学も、認知心理学も、リハビリテーション諸科学も、とにかく神経心理学に重なる項目はすべて本書に収められている。この程度のサイズ(711ページ)にしては、その手落ちのなさは憎らしいほどである。

本書の魅力は編集方針にある。詳細な説明が必要な項目には十分な紙面が割り当てられ、簡単な説明で事が足りる項目は数行で済まされている。このめりはりがすばらしい。例えばAの項目を例にとると、重点項目に選ばれているのは acalculia 失計算, aging 加齢, agnosia 失認, agraphia 失書, alcoholism アルコール中毒症, alexia 失読, amnesic syndrome 健忘症候群, amusia 失音楽, anomia 失名辞, anosmia 嗅覚消失, anosognosia 病態失認, aphasia 失語, apraxia 失行, assessment 評価, ataxia 運動失調, attention 注意, audi-

tory perceptual disorders 聴知覚障害, autism 自閉症, autotopagnosia 自己身体部位失認の19項目で、これらについては総説に近い詳細な解説がなされている。嗅覚消失, 評価, 注意, それにアルコール中毒が同じ重要性を持つものとして、失認などと肩を並べている点が極めてユニークで、確かにこれぞ神経心理学である。

さらに、これらの項目を執筆しているのは、失計算がXavier Seron, 失認がGlyn W. Humphrey, 失読がFrank Benson, 健忘がAlan J. Parkin, 健忘症候群がAndrew R. Mayes, 失音楽がHarold W. Gordon, 失名辞がGabriele Miceli, 病態失認がGeorge P. Prigatano, 失語がHarold Goodglass, 評価がJ.R. Crawford, 運動失調がJ. Graham Beaumont(本書編集者の1人), 注意がMichael I. Posner, 聴知覚障害がLuigi A. Vignolo, 自己身体部位失認がGianfranco Denesと、それぞれの領域で求め得られる最高の人たちである。内容が充実しているのも、執筆者を見れば、なるほどさもありなんと納得させられる。

編集方針でもう1つ見逃せない卓抜なアイデアがある。それは解剖学の項目で、脳, 脳幹, 小脳, 脳神経, 辺縁系, 前頭葉, 頭頂葉, 側頭葉, 後頭葉, 感覚運動皮質, 皮質有線野, 視床, 錐体路など、非医学系の専門家にとってややなじみにくい知識が大きな項目と

して拾い出され、それぞれが大局的な立場からうまくまとめられている。非医学系学習者への配慮が行き届いた編集である。

本書は事典だが、教科書としても使える。むしろ教科書としての価値のほうが高いかもしれない。ページを飛ばしながら、関連項目を拾ってゆくと、時間を忘れてしまう。通常の教科書より遥かに入りやすく、読みやすい。

本書は翻訳書なので、項目が原語(英語)配列になっているが、項目検索はそんなに苦にならない。各ページの肩には英語表記が出ているし、最後には英語索引もある。日本語からの検索も、巻末の索引と巻頭の日本語用の見出し語索引を併用すれば、こちらもそれほど厄介ではない。この辺りは使用の便を考え、周到に編集されている。

最後になったが、本事典には監訳者の1人岩田誠教授の漢字失読の業績が、彼の有名な大脳地図と共に引用されている。彼の他にも、数えてみると、14人ほどの日本人学者の業績が収録されている。この数は、わが国の神経心理学にとって、喜ぶべき数なのか悲しむべき数なのか、評者にはちょっと判断がつかない。

A5 頁744 2007年 医学書院刊
定価 19,950円(本体19,000円+税5%)
[ISBN978-4-260-00019-2]